

フィールドシンポジウム：大台ヶ原の森は蘇るのかー長期モニタリングから森とシカの生態系保全を考える

大台ヶ原フィールドシンポジウムに参加して

北海道大学大学院文学研究院

立 澤 史 郎

Impressions regarding Odaigahara field symposium. Shirow Tatsuzawa (Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)*

1988年にKONCが主催した大台ヶ原シンポジウムでは、関西唯一の“奥山”である大台ヶ原の中核部でニホンジカ（以下シカ）が増えていること、そのシカがトウヒ等の樹皮剥ぎを起こしていることが明らかになり、大台ヶ原の“原生的な自然環境”を守るためにシカを管理すべきかどうかなどが議論された。このシンポジウムは、大台ヶ原の自然と人にとって重要なターニングポイントとなり、日本の森林生態系の保全・管理の方向性にも影響を与えた。それから15年、様々な議論や試行、法制度の改定等を経て、2003年にスタートした「大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画」で全国に先んじて国立公園中核部でのシカの個体数調整が始まった。

その後、全国でシカと自然植生の関係に関する研究やシンポジウムが盛んになったが、様々な植物研究者が口々にシカの悪行を報告する中で、ほぼ唯一、シカ屋の目から鱗を剥がしたのが「ブナ林にとっては百年に1回更新があれば問題ないんだよね」という中静さんの発言であり、その発言を受けて「(中静さんはそう言ってるけど)シカは百年に1回くらい実生を見逃してくれるもの?」という疑問でシカ屋を困らせたのが明石さんだった。そんな発言をしたばかりに、中静さんは本当にそれ(百年に1回の更新)で大丈夫なのか調べ続けるはめに、明石さんは自分でシカの採

食生態を研究することになった(と想像している)。

そして実際にシカ捕獲が始まった2004年から15年。大台ヶ原の森とシカの関係はどうなっているのか。それを保護管理計画の先頭に立つ環境省、そして中静さん・明石さん・横田さんが現地で解説・講演されると聞き、矢も楯もたまらず飛行機に飛び乗った。知りたいことは3つ、どの程度シカの捕獲と低密度化が進んでいるか、その密度ならシカは実生を見逃しそうか、そして百年後に大台の森が残って(または再生して)いそうか。

約20年ぶりに東西大台を歩きつつ多くの情報をいただき、地形や微気象の多様性に加え、ニホンカモシカやツキノワグマなどの動態、さらには気候変動など、多くの要素が絡んで一筋縄でいかないことを再認識した。3つの疑問についても、当然ながら単純な「解」は得られなかった。

しかし、例えばシカの低密度化を進めるには低標高域との個体の季節移動状況の把握が必要なこと(澤志さん)、林冠木とササの組み合わせでシカ採食下の森林更新状況が異なること(中静さん)、ニホンジカはシカ類の中で特に厄介な(低質食物条件でも消化能力が高い)こと(明石さん)など、他地域での議論に大きく貢献する知見が得られており、長期モニタリングデータをベースとした議論の重みと重要性をひしひしと感じた。そ

して何より、長期モニタリングを通じて現場で培われた行政と研究者の信頼関係(問題意識の共有)が感じ取れた。

問題意識が共有されると、次の課題も自ずと見えてくる。シカ屋の立場からすると、上記の季節移動の実態、(特に近年の再増加における)繁殖中心の所在、(特に冬期の)食性と栄養状態などを押さえれば、個体群管理の可能性も見えてくる。これは知床や屋久島はじめ、シカと森林(と人)の関係再構築に悩む各地で求められている情報でもあるが、実はシカの基礎生態(生活史)研究がこの15年停滞していることも、本シンポジウムで再認識した。

このように「わかったこと」と「わからないこと」

を現場で共有し、今後の課題を設定・調整できるのが、フィールドシンポジウムの大きなメリットだ。KONCのシンポジウムは、冒頭の1988年シカシンポにしても、外来種シンポにしても、じわじわと全国的に影響を与える。今回の成果も次第に波及し、長期モニタリングが国立公園や世界遺産地域における議論のスタンダードになることを期待している。

最後に、今回の企画・実施にご苦労いただいた事務局のみなさん、数十年の欠札を気にせず議論の相手をしてくださった横田岳人さん、米田健さん、岩本泉治さんをはじめ参加者のみなさんに御礼申し上げます。